

# ARAI NEWS

Actual Story From Inside.

## ポムス奮闘記

### —イメージの落とし穴—

夢の始まり

「10万ページのヘルメットカタログなんて……」思わずスタッフの面々は顔を見合わせた。今から5年前のことです。契約ライダート同じように自分だけのヘルメットをメーカーにつくらせたい——こんなユーザーの夢をかなえるためアライは長い間考えてきました。しかし量産メーカーにとって、ひとつひとつ仕様が違う製品を、しかも「ユーザーに負担をかけない価格」でつくることはどう考えても至難のワザでした。結局アライが出した結論はこうです。「効率とか損得はあと回しにして、とにかく一個一個手作りでやろう……」

こうして業界初のオリジナル・オーダーの生産体制づくりがスタートしたのですが、ある時、スタッフのひとり「どこでお客さんはどうやって注文するのさ……?」とつぶやいたのです。

この時はまだ事態を軽くみていました。それでは試してみようという事で選ばれたのは、デザインにうるさい雑誌記者B氏、以前から自分のメットをつくれとアライを強迫しているノビスのM君をはじめ何人かのヤングライダーの方々にそれれオ리지ナル仕様書をつくってもらうことになりました。

きびしい結果

結果は次の通りです。ヤングライダーの面々はともかく仕様書らしきものをつくったのですが、実物のみから不気味なヘルメットを見ても、それが自分がデザインしたものであることを信じようとしませんでした。「頭の中のイメージと実物が違いすぎる。」と罵るのです。

B氏はや、コックゲイな結末を迎えました。前と後のデザインがつかないのです。彼は人類初の「四次元ヘルメット」のデザイナーになってしまったのです。勿論、いくらアライでもこんなヘルメットはつくれません。未来のGPライダーM君は悲憤でした。彼は消ゴム二個と沢山のエンピツをつぶしたあげく仕様書を書くのをリタイヤしたのです。「やっぱりデザインというのは特別な才能が必要なんですネ……」M君の呪いに満ちた言葉はスタッフの心に重く響くのでした。

でも、こんな事で落ち込んでしまうアライではありません。早速、原因究明が始まりました。

巨大なカタログ

要するに我々が「カッコいい」と思っているイメージとは、ある瞬間、あるいはある方向からだけ見たもの、又はモヤモヤとはつきりしないものらしいのです。デザインにしても色の組み合わせによっては全然違うものに見えてしまいます。この辺をしっかりと押えておかないとオーダーのお客さんを逆にガツカリさせてしまうこともありうる……。これはひとつの発見でした。

「フリーなデザイン注文はお客さんのリスクが大きい。とりあえずデザインは決めておいてこれに実際の色を組み合わせさせてそこから選んでもらうたらどうだろうか?」つまり新手のメニョウカタログ的な組み合わせを自分で確認しながら自分の好みのものを指定する。人の好みは全部違うから個性は主張できる訳だ。「すると組み合わせは沢山の方がいいけど、かなり薄いカタログになりそうだな……」

二んな話の後、すぐ実行するアライのことですからカタログのサンプルをつくらんと同時に、ちよつとページ数を計算してみたい。と、基本デザインが三〇種類、色の指定が3ヶ所、選べる色(塗料)が二〇色として、あとパーツ類も選べるようにし

たいからこれらを掛けると……エッ? 一六〇万個!?

確かにメニョウの種類は多い方がいいのですが、一ページに一六種類のヘルメットを載せるとカタログのページ数は……何と一〇万ページノになってしまいます。す、こんなバケモノをお客さんがマジメに見てくれるでしょうか?

天からの声

現在のポムスの組み合わせが二億五〇〇〇万を超えていることを思うと、進化とはつくづく恐ろしいものですが、この時点ではボイセンとする事案でした。もつと簡単にイメージを具体化する方法はないのだろうか……? 「目の前で次々に形や色がとりかえられたらなあ……」未だのコンピュータじゃあるまいし……! こんな弁解とも冗談ともつかない話かわされている時、突然その声か響いたのです。

「だったらコンピュータでやればいじやないか!」

ふり返るといつのまにか大きな影がせまっていたのです。

一つづー

